

レッツ、バイリンガル

奨励	横山 順一〔よこやま・じゅんいち〕
奨励者紹介	日本キリスト教団石橋教会牧師

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、[『]霊[』]が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者があり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞くとは。」

(使徒言行録 二章――一節)

Aさんの言葉

現在、滋賀の堅田教会の竹内宙牧師が大津署に逮捕され、拘留されています。もう十日になります。震災に乗じてなされた、思想や人権運動への弾圧だと私は思っています。私が関わっている関西労働者伝道委員会でも、専従者の大谷隆夫牧師が逮捕されました。四月五日のことでした。約四ヵ月拘留され、七月二十五日に保釈されて現在公判中です。簡単に言うと、昨年の参議院選挙のとき、釜ヶ崎の労働者たちに投票をしようと呼びかけたことが逮捕の理由です。竹内牧師の事件共々、「何でやねん」と叫びたい出来事でした。

逮捕されたその夜、釜ヶ崎医療連絡会議の事務所に四十名を超える人たちが集まって救援対策会議が開かれました。七時から始まって、十時近くまで会議をしました。このときに、次の週の土曜日に、第一回めの抗議集会を開くことが決められました。

私は初めて会う人ばかりだし、会議は長いし、何よりも大谷さんの様子も情報不足でよく分からないし、他に逮捕された六名のことはもっと分からないし、教区や教会にも何も報告できないうちに集会をもつことがためらわれました。そこで、率直に、「もうちょっと状況を把握してからにしませんか」と意見を述べました。

すると、一人の釜ヶ崎の労働者のおじさんが、毅然として私にこう言いました。「あんな、お兄さん。こういうことは即やらんとあかんのやで。やられたら、すぐにやり返さな。それが俺らのやり方なんや」と。少し怒ったような印象もあって、私は口をつくみました。もちろん、彼は怒ったのではなく、私に教えてくれたのです。この方、仮にAさんといいたしますが、今ではすっかり仲が良くなりました。普段は気の優しい穏やかな方で、私の言うこともよく聞いてくださるのです。残念なことに、Aさんも、労働者に投票させよという抗議活動をした件で逮捕され、現在服役中です。3・11の震災後、こんなことがたくさん起こっているのです。

ところで、Aさんが語った「やられたら、やり返せ」とは、非常に過激な言葉です。イエスの教えと相矛盾するような言葉です。でも私はAさんから、「釜ヶ崎の労働者の生きる権利が、権力によって踏みにじられるようなことに黙ってはおれない。黙ったままでは、いよいよ都合の良いようにされてしまう。こういうことにはすぐに意見を述べ、行動しなくてはならない」、そう教えられたように思っています。それは決してイエスの教えと矛盾することではなく、イエスこそ、もしそのようなことがあったら誰よりも先に行動される方であるはずだと思うのです。まさに今、そこに強盗に襲われて傷つき倒れている人がいるのに、「もっと情報を集めてから」と言った私の言葉は、悠長な言葉でした。遠巻きにして離れ去ったレビ人や祭司と同じであったのです。

ですから、Aさんの言葉は、同じ日本語だけれど、私には知り得ない、釜ヶ崎の労働者とその彼らに連帯しようとする者にしか分からない、違う背景と意識が込められた別の日本語だったのだと振り返っています。逆にAさんには私の言葉が別の日本語と感じられたことでしょう。

イエスに従うこと

さて、今日の聖書箇所は、弟子たちにイエスの約束通り聖霊が与えられ、彼らがほかの国々の言葉で話し出した、そういう出来事が描かれた箇所です。五旬祭（ペンテコステ）には、毎年のように読まれる聖書箇所です。この記述が何を知らせようとしたものなのか、それを考えるととても重要であるのは、最初の一節の文言です。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると」とあります。この一同が一つになって集まっていると、とは、もちろん一つの集団としてという、外見的な意味もあるでしょう。しかし、それだけではなく、心をついて集まっていたという、内面の姿の説明でもあると思うのです。

弟子たちはそれぞれに、他の弟子たちを出し抜いても偉い者になりたい、重さを用いられる地位に就きたいと強く願っていました。誰もが自分からイエスの弟子となったのではないわけです。そして誰もがそれぞれの事情を抱えて、つましく生きておりました。その事情をイエスはよく知ったうえで、弟子として選ばれたのでした。おそらくは十二弟子内で、お互いの人生の背景を思いやり、深い共感をもったり、理解しようとしたことはほとんどなかったであろうと想像します。みんななりあえずイエスに従っていくことだけで精いっぱいだったでしょう。だからこそ、イエスの十字架の出来事の前に、みんながバラバラになり、ちりじりになって逃げ去ってしまったのです。

しかし今や、復活の主が一切を許し、昇天された主が、自分の証人として生きるよう声を掛けられました。それに応えてユダに代わる新しい弟子マティアが加えられました。彼らはようやく、自分たちが等しく用いられ、等しく覚えられていることに気づかされたのです。そうしてイエスの、生前最後の別れの説教のなかで、「互いに愛し合いなさい、それが掟であり、条件である」と語られたことをまざまざと振り返り、心に刻み直したのではないかと思います。

イエスに従うことは、競争ではありませんでした。生きるための知識の習得でもなく、修行を積んで何事かを悟り体得することでもありませんでした。自分のことだけでなく、相手のことも思いやること。隣人から声を掛けられたときに、無視したり無言で返したり、ましてや正反對の声を掛けたりするのではなく、聞いて考えること、応えることでした。隣り人のあり様を、自分自身の言葉で考えて返すことであったのです。

私とあなた、互いの言葉を

私は、大谷さんたちの裁判に関して統一弁護士会議に出席しています。この弁護士団には八名の弁護士がいて、大阪一人権派弁護士たちなのですけど、それでも彼らが弁護士方針などを語り出すと、全く私たちにはちんぷんかんぷんです。たとえば、少しだけ紹介すると、「本判決は、本来行政代執行の手続きによらなければならなかったのに、これによらなかったという点で、本件工事の法的瑕疵は重大であり、威力業務妨害罪における業務としての要保護性も認められないとした」。ざっとこんな感じです。こういう話が優に一時間は続きます。懸命に聞いても理解できなくて、死にそうです。まるで新来者や求道者に、牧師が注解書を丸読みして聞かせる説教のようなものです。専門用語や業界用語を多用すると、相手に通じない。そればかりか一番肝心な心を失わせてしまうのです。

弟子たちは「心」なのだと分かったので、一つとなって集まっていた、のです。ですから彼らがガリラヤの言葉、アラム語で話さずに、他の国々の言葉で話し出した、という出来事は、彼らが自分たちの間でだけ通じるアラム語ではなくて、相手に分かる、相手の立場になって言葉を語り出したということだったのだと思うのです。

普通外国語で話すためには、相当の学習が必要です。並々ならぬ苦勞を伴います。そうではなく、突然彼らが色々な国の言葉で話し出したという出来事は、与えられた聖霊の意味をも表しているのです。個人の能力や知識などではない。例えば良い歳をした大人が、赤ちゃんに向かって「おじいちゃんでちゅよ～」といきなり幼児語で話すことができるのと同様、相手の立場に立ち、思いをくむとき、できるように変えられるのです。うわべでない言葉を語ること。「そんなの無理、超難しい」と言いたくなります。でも、聖霊の力によってそれが誰でもできる、可能である、語ることができると示す出来事であったのです。

ご承知のように、バイリンガルとは二カ国語で話すことをいいます。日本では、日本語と英語という意味で使われることが多いでしょう。そしてそれが国際化の必須条件のようになっています。それも時代の要請です。しかし私たちは、神さまの要請として二カ国語を話せるようになりたいと思います。自分のことも大切です。同じように隣人のことも大切にしたいのです。「知らん」とは絶対に言いたくない。私とあなた、自分と隣人、互いの言葉を使える者になりたいと思います。

天の神様、聖霊の風によって、他者との歩みに押し出されていきます。どうかこれからも聖霊によって私たちを包み、他者を覚える次の一歩が踏み出せるよう後押ししてください。